

セミナー1：シェイクスピアが描いた動物や怪物たち

本セミナーでは、シェイクスピアとベン・ジョンソンの劇における動物や怪物の表象を、王権、階級、聖書、動物寓話、図像（紋章・エンブレム・図版）、娯楽（熊いじめ・狩猟）など、多角的観点から考察した。近年、シェイクスピア研究において動物の表象が着目されており、2000 年以降に隆盛を極めたアニマル・スタディーズ、エコクリティシズム、ポストヒューマニズムといったアプローチでは、主に動物の比喩と同時代の自然環境あるいは人間中心主義との関係といった観点から考察がなされてきた。しかし、本セミナーでは登壇者各自が、特定の動物の比喩やイメージの分析をするという Caroline Spurgeon や Audray Yoder が試みたような原初的アプローチを試みた結果、政治・社会的問題、書物や図像、娯楽などの観点から考察することで、それぞれが単なる比喩やイメージ研究に留まらず、奥深く示唆に富む研究となり、有意義なセミナーになった。（なお、本セミナーでは当時流布していた Edward Topsell らの博物誌の分類に従い「怪物」を「動物」の一種とみなした。）

セミナーの前半では、コーディネーター（本多）が本セミナーの趣旨などを簡単に述べた後、コメンテーター（森先生）も含めた 5 名が各自 20 分間の発表を行った。後半では、各自の発表に対する質疑応答を、まず登壇者同士で、次に聴衆を交えて行い、最後にコメンテーターから登壇者の発表へのコメントとセミナーを総括するお言葉を頂戴した。以下に各メンバーの発表要旨を登壇順に記す。

宮廷仮面劇『オベロン』における動物の政治利用

ーヘンリー王子の皇太子就任をめぐるクマ劇とアーサー王のモチーフ

田村 真弓（大東文化大学教授）

本発表は、1611 年 1 月 1 日に上演された宮廷仮面劇『オベロン』においてヘンリー王子の乗る凱旋車を引いた二頭のシロクマの意義を、1610 年 5 月 31 日の皇太子就任式にまつわる一連の余興や同時代のクマの登場する劇と共に当時の政治的背景を考慮しながら分析し、ステュアート朝の宮廷がクマという動物を祝祭で利用した意図を明らかにした。シロクマの子どもの捕獲や『ムセドラス』の上演を契機として、クマが本来持っていたレスター伯ロバート・ダドリーやアーサー王伝説との関連性が思い起こされた結果、シロクマがカトリックと戦うプロテスタント騎士道を奉じるヘンリー皇太子の化身となって『オベロン』で凱旋車を引くことになったと結論づけた。

シェイクスピア劇における蛇の表象

—『アントニーとクレオパトラ』『ハムレット』『夏の夜の夢』を中心に

丹羽 佐紀（鹿児島大学教授）

本発表では、シェイクスピアの3つの劇作品における蛇の表象についてそれぞれ論じた。『アントニーとクレオパトラ』では、太陽神ラーやナイル河を体現する身体国家としてのクレオパトラと、胸に蛇をあてがいアントニーを想いながら生き死ぬ彼女の姿が、いずれも蛇との密接な関係性において描かれていることを明らかにした。『ハムレット』では、亡霊の台詞にある「王冠を被った蛇」という表現から、この蛇が創世記における誘惑の蛇と同時に、上演当時のイングランド王室をも観客に想起させる役割を果たしていることを述べた。『夏の夜の夢』では、妖精の世界と人間の世界で、蛇が異なるイメージを持つ生き物として一つの作品の中で対比的に描かれていることの面白さや劇的效果を論じた。

“Truth’s a dog that must to kennel”—『リア王』における犬のイメージと喪失する理性と衣服

廣野 允紀（愛知大学助教）

本研究発表では、シェイクスピア『リア王』における犬を中心とした動物表象を取り上げ、権力の喪失と嗅覚の鋭敏化という観点から、人間と動物の境界線について考察した。『リア王』における犬のイメージは、品種や血統による序列と結びつきながら、登場人物の忠実さと卑しさという二重の性質を象徴する比喻として機能している。また、この動物のイメージは登場人物の非人間性を浮かび上がらせると同時に、絶望と苦悩の中にある人間の哀れさをも映し出している。さらに、理性と権力を失ったリアは、獣のように嗅覚を用いることで、逆説的に「人間」を再認識する。嗅覚は、人間を動物へと近づけると同時に、「人間」の本質を再発見させる感覚として作用しているのである。このように、『リア王』における犬や狼のイメージは、単なる侮蔑的表現にとどまらず、人間的尊厳とその脆弱さを根底から問い直す装置として機能していることを明らかにした。

『ヘンリー六世』三部作における動物・怪物比喻の意義—寓意的人物・視覚効果・教訓性

本多 まりえ（明治学院大学准教授）

本発表では『ヘンリー六世』三部作の動物と怪物の比喩に着目し、これら比喩の三つの意義、即ち、寓意的人物・視覚効果・教訓性を、神話、動物寓話、娯楽の観点から考察した。まず、本三部作で、シェイクスピアは道徳劇の寓意的人物のように、動物や怪物をその人物の性質を示す記号として用いることで、まだ観劇には慣れていなかった観客の理解を助けたと指摘した。次に、本三部作では、熊いじめや狩猟の比喩により観客は戦闘場面の視覚的イメージが容易に掴め楽しめたと論じた。最後に、本三部作は一見戦争を美化した劇に見えるが、貴族の戦闘が狩猟や熊いじめといった動物の闘いに貶められていることや、戦場で誤って父や子を殺してしまった一般兵の姿やヘンリーの平和主義を考慮すると、戦争の残酷さや権力に執着する貴族達の愚かさが教訓として描かれていると解釈でき、本三部作はフィリップ・シドニーが提唱するような「楽しく教える」劇であると結論づけた。

『リチャード三世』における猪、犬、馬一狩りと王国

森 祐希子（東京農工大学名誉教授）

本発表では、複数の動物が総体的に生み出す効果を、『リチャード三世』において多用される猪・犬・馬という三種の動物が形成する「狩り」のイメージに注目して考察した。狩りは王侯貴族の娯楽であると共に権威を示す役割を持ち、権力の象徴として歴史劇と親和性が高い。15世紀から16世紀の狩猟本に繰り返し描かれる獲物の鹿、猟犬、馬の組み合わせの図版を、シェイクスピアは獲物を鹿からリチャードの紋章である猪に変えて再構築した。その枠組みの中でそれぞれの動物のイメージや役割を反転・輻輳させ、リチャードを狩人から狩られる獲物へ、猟に欠かせない有用な猟犬を人に害をなす地獄の犬へと変じさせている。馬は狩猟と戦争双方と結びつき、王の権威とその失墜を示している。複数の動物表象を相互に作用させる狩りのモチーフを探求することで、最終的に馬と王国と命を失うリチャードを描き出すシェイクスピアの、動物使用の巧みさを明らかにした。

今回のセミナーは、コーディネーターの本多が2023年のシェイクスピア学会で発表した際、アンケートに本多に動物のセミナーをして欲しいとの要望があったことがきっかけとなり実現した。匿名のためどなたかは存じ上げないが、この場を借りて御礼申し上げたい。

また、今回は本セミナーと同時時間帯に大変魅力的なセミナーが2つ開催されたが、そのような状況にもかかわらず本セミナーにご参加いただいた聴衆の皆様、中でもご示唆に富む質問や貴重なご助言をして下さった本橋哲也先生と野上勝彦先生に厚く御礼申し上げたい。

さらに、セミナーメンバーの皆様、学会担当委員チーフの近藤弘幸先生、教室担当の団野恵美子先生、その他のシェイクスピア協会委員の先生方にも深く感謝申し上げたい。特に森祐希子先生には、研究面で様々な有益なご助言をいただいた上に、折に触れて労いや励ましのお言葉まで頂戴し、感謝の念に堪えない。

末筆ながら、セミナーメンバーの皆様、ご参加いただいた皆様、委員の皆様、これをお読みの皆様全員のますますのご健勝とご活躍を祈念しますとともに、今後ともご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

コーディネーター：本多 まりえ

